



でも やわらかく

代表:

平川秀幸

連絡先:

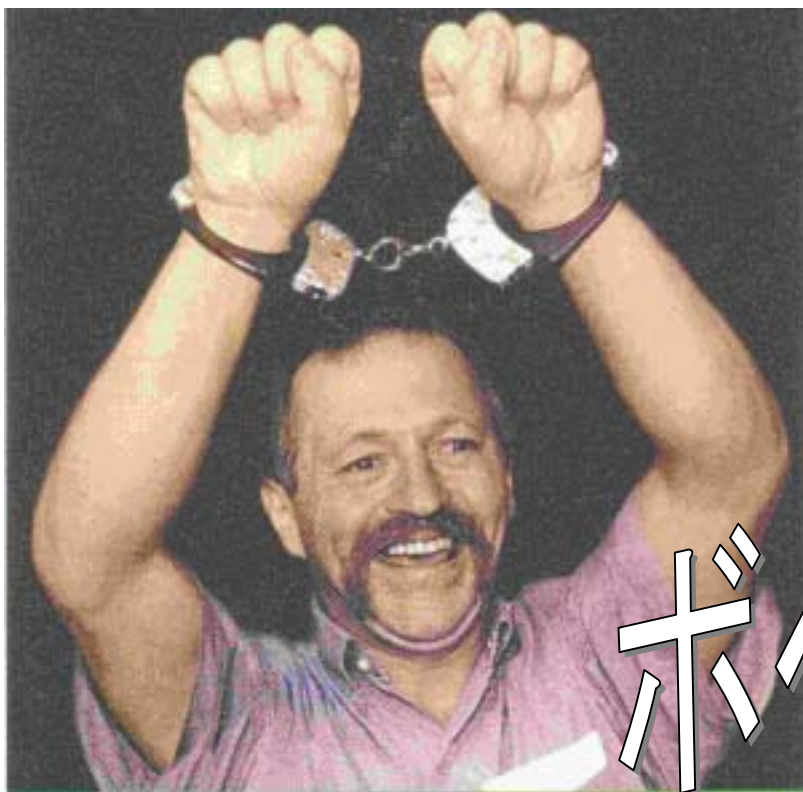
小森政孝 (ATTAC 京都事務局)

TEL/FAX 075-706-3875

E-MAIL [attac\\_kyoto@yahoo.co.jp](mailto:attac_kyoto@yahoo.co.jp)

Homepage [http://k\\_attac.tripod.com/](http://k_attac.tripod.com/)

第3号 2002.9.21 (土)



ボベ登場!!

日時: 2002年10月29日(火)

18:30 start

場所: 法然院 (京都市左京区鹿ヶ谷)

最寄りのバス停: 市バス 32 系統  
(南田町下車)

参加費: 無料

## ジョセ・ボベトークライブ in Kyoto

問い合わせ先:

京都精華大学新学科準備室

075-702-5197

[tyoichi@kyoto-seika.ac.jp](mailto:tyoichi@kyoto-seika.ac.jp)

実行委員会

[bove\\_in\\_kyoto@yahoo.co.jp](mailto:bove_in_kyoto@yahoo.co.jp)

主催: 京都精華大学

協力: ジョセ・ボベ トークライブ  
in Kyoto 実行委員会

ある時は、牧羊農家。またある時は、手にのこぎりを携え建設中のマクドナルドを切り刻み、はたまた、世界中の視線が集まったパレスチナはラマラの議長府で人間の盾となり・・・

その行動力や留まるところを知らずの<ジョセ・ボベ>その人が日本にやってくる。

「地球は、売り物じゃない」と叫ぶ彼の肉声を聞いてみないか。そして、私たちの思いをぶつけてみよう!

[http://k\\_attac.tripod.com/bove/](http://k_attac.tripod.com/bove/) (携帯対応)



市場原理に振り回  
されない、企業主導  
はまっぴらよ！

ジョゼ・ボベさん、  
おこしやす、京都へ  
—— 法然院でみっちりトーク ——  
—— もうひとつの世界を  
—— 希望ある未来をともに・・・

四十九歳のオジサ  
ンとてあなどって  
はイケナイ！



1999年、世界社会フォーラム(ポルトアレグレ)でデモに参加したボベ氏

1998年、WTO(世界貿易機関)を舞台に繰り広げられたEUと米国の争い。その中で、事態の根源となっていた農業ビジネスのグローバル化に対する象徴的闘いとして国際的注目を集めたのが、ボベたちの行った「マクドナルド解体」事件だ。  
以前より、仏政府は国内の子牛飼育農家への「成長ホルモン投与」を促しつつきていたが、農民たちの抵抗や世論の反発の前に、家畜への成長ホルモン投与を禁止するに至る。しかし96年、米国はホルモン剤投与によって飼育された牛肉がEUによって輸入拒否されたことを、WTOに提訴することで問題が再燃。

折りしも、牛海綿状脳症(狂牛病)やダイオキシン汚染、遺伝子組み換え作物(GMO)などの問題が噴出しているときである。

「<マクド>をつぶして何になる？」とは遠く離れたニッポンの感覚だろう。自らも牧羊農家として働くボベにとって、「世界を支配しようとする食品生産方式の典型的商品」が<マクド>に他ならないことは明白となっていたし、また、仏国民も多くがこの行動を賛意を持って迎えた。

では、では、10/29、法然院にて「安いマクド」、「お手頃なユニクロ」に潜む罠をボベと共に解き明かそう！！



講演中のボベ氏

### ボベ、激動の足跡

- 1953年 ボベ、ボルドー市のタランスという町に生まれる  
幼少期は、カリフォルニアにて過ごす
- 1971年 パートナーとなるアリス・モニエと出会う
- 1972年 ラルザック委員会を組織(軍用地拡張計画に反対)
- 1974年 良心的兵役拒否者の認定が却下される
- 1976年 アリスと共にラルザックでの生活開始(入植)
- 1981年 ミッテラン大統領就任  
同時に、軍用地拡張計画が破棄される

- 1987年 農民連盟結成
- 1980年代 ムルロア環礁の核実験反対行動に参加
- 1990年代 グリーンピースの活動にも参加  
GM種苗(遺伝子組み換え)の破壊
- 1999年 ミヨー市に建設中のマクドナルドを解体
- 1999年 シアトルWTO会議(米国)  
~ポルトアレグレ世界社会フォーラム(ブラジル)
- 2002年 パレスチナのラマラ(自治政府議長府)で人間の盾となる  
収監先(収監理由は上記マクドナルド解体)の刑務所より釈放
- 2002年 10月 そして、日本にやって来る

## 「農」について語る

——— B S E (牛海綿状脳症)は、新自由主義的  
グローバリゼーションの必然的帰結であった ———

おはなし：田中 一郎

B S E (牛海綿状脳症)が日本ではじめて発生してから1年がたちました。先月には5頭目の感染牛が発見されましたが、実はこのB S E問題も自由主義的グローバリゼーションと深くかかわっています。

B S Eは、牛の脳組織がスポンジ状になる致死性の病気で、プリオンというたんぱく質の異常が原因であるとされています。これと同じような病気に、ヒツジのスクレイピーがありますが、B S Eは、このスクレイピーに感染したヒツジの内臓や皮や骨などを使った「肉骨粉」を牛に与えたことによってはじまり、その牛の内臓や骨が飼料になることでさらに広がったと考えられています。

乳の出を良くしたり肉質を早く良くしたりするために、効率の良い高たんぱく飼料として牛に肉骨粉を与えることは、1950～60年代から行われていましたが、その頃にB S Eの発生が報告されていないのは、当時の肉骨粉が、有機溶剤で脂肪を除去し、さらにその有機溶剤を取りのぞくために数百度の超高温蒸気で処理されていたので、プリオンが不活性化されていたためだと考えられています。

ところが、80年代に入ると、コストダウンを進めるために有機溶剤処理も超高温処理もしない新しい加工法が急速に普及し、86年にイギリスではじめてB S Eの発生が確認されました。これ以降、イギリスでのB S Eの発生は急速に広がり、96年にはついに、牛から感染したと思われる人間の新型クロイツフェルト・ヤコブ病の発症が確認されました(患者はいずれも数か月で死亡)。

イギリスは88年に国内で牛の肉骨粉を牛の飼料にすることを禁止し、89年には感染の危険性が最も高いとされる牛の脳や内臓やせき髄などを人間の食用にすることを禁止しました。しかしイ

ギリスは、国内市場を失ったはずの肉骨粉をつくり続けました。廃棄物の量を大幅に圧縮してコストを削減することができ、しかもそれをヨーロッパや日本などに売りさばくことで、さらにもうけを拡大することができたからです。アメリカなどの大規模農業に対抗しなければならないヨーロッパや日本は、コスト削減と効率化のために、肉骨粉を安値で輸入して活用しました。このようにして、B S Eはまさにグローバルに広がったのです。

現在では、あらゆる食品が工業製品のようになっています。牛や豚などの家畜は、自然の状態では絶対に摂取することのない肉骨粉などの飼料や各種の薬剤を使って大量生産され、いまやクローン牛まで生産されています。野菜や穀物や果物も、農薬や化学肥料薬を大量に使用して生産され、害虫を殺す毒素を持った遺伝子組み換え農産物までつくられているのです。大きな商社やアグリビジネスが第三世界の農民に低賃金で生産させ、大量に持ち込んでくる農産物も問題です。それは第三世界の人々にとって必要な穀物などの生産を解体して先進工業国向けの輸出用農業に転換することでもあり、飢餓の増大と大規模な環境破壊の原因ともなっているからです。

また、このような低価格の輸入農産物に対抗して生き残るために、欧米や日本の小規模農業も、自然とはほど遠い工業的方法を採用することを強いられているのです。

新自由主義的グローバリゼーションのもと、最大限の利潤をもとめての農業の「効率化」「低価格化」が、世界中の人々の生活を破壊し健康を脅かしています。それを象徴するのがB S E問題です。「危ないものは買わなければ良い」ではすみません。

いまの農業のあり方を根本から考えなおしていく必要があるのではないのでしょうか？



8月例会報告 (8月24日キャンパスプラザ京都)

## コトバンジャムダム建設にみる

### 日本ODAの実態

それは、果たして「援助」なのか！？

報告:山沖 直樹

ATTAC京都8月定例学習会のテーマは、「ODA」。日本のODAによるダムや港湾などの建設が、援助としての役割を果たしていないばかりか、逆に現地の文化や環境を破壊しているという現実がある。「これは人道に対する罪だ」「金を出した日本にも責任があるのではないか」。そのような現地からの声は、ついに史上初のODA裁判にまで発展していった。共存共栄の理念に裏打ちされ、途上国の開発に貢献していたはずのODA、その真実の姿とはいかなるものだったのか。その真相に、インドネシア、コトバンジャンダムプロジェクトから迫る。

1991年9月3日。インドネシア・ジャカルタの日本大使館の前には、住民代表5名と、20数人の支援学生たちが、激しいシュプレヒコールをあげていた。日本のODAによるコトバンジャンダム建設に対する抗議行動である。

あれから11年、事態はますます緊迫の度を増すばかりだ。それだけ、住民の生活は圧迫されている。もともと、この地方の住民は長い年月の中で築き上げてきた独自の文化を守って暮らしてい

た。自給自足が原則で、現金収入といえば、ゴムの栽培くらいのものである。現地住民が、その土地を離れて生活することが非常に困難であることは目に見えていた。

そのためスハルト政権下のインドネシア政府は、移転の条件として十分な補償金とともに、すぐに生活をしていけるように、水や住居、すぐに収穫できるゴム園などを保証した。

ところが、その約束はいまだに果たされずにいる。

バラック小屋のような住居、水の出ない欠陥井戸、若木ばかりで当分収穫が見込めないゴム園……。住民が移転させられた土地は、約束されたものとははるかにかけ離れたものであった。

今、住民の多くは遠くはなれた場所まで出稼ぎに出たり、日雇い仕事をしたりとその日暮らしをしている。中には、生活苦のため、若い娘を売りに出さなければならなかった家族もいるそうだ。ダム建設は現地住民の生活と文化を完全に破壊してしまった。

それだけではない。もともと、この地域には豊かな熱帯雨林やスマトラ象などの貴重な動物の生息する、自然の宝庫であった。と



ころが、ダム建設によって広大な熱帯雨林が水没し、生活の場を失った動物たちの多くが命を落とした。環境に与える影響もまた大きかったのである。

さて、それほどに被害を出してまで建設した当のダムは、一体どれほどの役に立っているのであろう。実は、ほとんど役に立っていないのである。

コトパンジャンダムの主目的は発電であり、114メガワットの電力生産が見込まれていた。ところが、1997年からの操業開始以来、その発電目標は全く達成されていない。必要な水量を確保できないためである。現地技術者によると、三つの発電機がフル稼働したのはたったの三日間だけだという。完全な欠陥ダムなのだ。

このようなことが起こった背景にはいくつかの事情がある。まず一つには、当時のスハルト政権下より続く、汚職と腐敗の構造がある。ODAの何割かがスハルトファミリー周辺の懐に流れ込んだという話もある。非人道的な住民移住も、直接的には役人や業者のピンはねが原因といえよう。

しかし、もっと大きな要因として、日本のODA自体のあり方に問題があったのではなかろうか。タテマエはともかくとして、日本のODAが必ずしも発展途上国の発展と福祉を目的としているわけではない。ひも付き援助こそなくなったものの、相変わらずの円借款・大規模案件主体の援助。事業を担う大手ゼネコンや商社などの利益を第一にする体質はいまだに変わっていない。

実際、ダム建設自体、最初に持ち出して

きたのは日本のコンサルタント会社であり、その後も、より多くの利益が得られるように、建設予定地の変更まで行われた。

また、外務省も、インドネシア国内における不正や被害に目を瞑るのみならず、積極的に隠蔽までしようとしていた。一度はじめたODAプロジェクトが中止になることは、省の面子に関わる重大事だったのである。そこには、現地の振興や環境・文化への配慮など端から全く頭がない、巨大な利権構造があるばかりである。

今年(2002年)の9月5日、コトパンジャンダム訴訟は現地住民によって東京地裁に正式に提訴された。原告は3000名に及び、しかも来年までには動物原告も含めての第二次訴訟が計画されている。原告団が求めているものは、主に現状復帰と正当な補償である。だが、実際問題として今の日本の裁判所では、勝訴は非常に困難というしかない。しかし、法的な場で日本の責任を追究することには大きな意義があり、それによって世論がODA見直しに大きく動いていったならば、それだけで裁判の目的は果たされたといってもいい。

そして、そのためには、何よりも日本国内での裁判支援の動きが鍵を握ることになるだろう。「支援する会」代表の鷲見一夫教授(新潟大学)は、日本国内での提訴を提案しているという。税金や郵便貯金を、このような非人道的な事業につき込んでしまったこと責任を、国民の立場から政府に問う裁判である。しばらく、ODAに注目せざるを得ないだろう。



# 真麻のでたとこ旅日記

v o l . 2

## 2002/09/15 (日) あ、南京で...! ?

一ヶ月前の8月15日、私は中国・南京市にいた。戦争中の日本軍の犯罪を私たちの時代に明らかにし自らの問題として反省し、謝罪と責任を果たしていこうという私たちのツアーは、中国当局から好意的に受け入れられていたせいか、宿泊先も快適、毎回の食事もゲスト用のレストランだった。私はスタディツアーの企画をしている神戸のHさんに「とてもHさんたち(貧乏?NGO)の企画とは思えないっすね、快適!」と軽口を叩いていたものだ。しかし帰国後、その南京市で食中毒事件! ?とニュースのヘッドラインに驚いていたら、どうやら毒物混入の疑い...しかも中国政府当局が報道管制を敷いているという情報もあったようだ。

先月の旅が、私にとって意味のある貴重な体験だったことは間違いない。だが少し不満に思ったこともあった。たとえば中国政府が現在すすめてる長江の三峡ダム建設に関して、資料として展示された水没する地域の住民の写真には「移転先で喜んでいる」というキャプション。写真には裁縫をする女性が写っていたが、彼女がはたして「よろこんでいる」のか「不安に思っている」のか、写真からだけでは読み取ることはできない。当局の都合のよい解釈が施されてしまうのだ。

それに私たちが見せてもらった場所は、初めから当局のお墨付きの場所には違いなく、まだまだ個人旅行で自由に見てまわることが難しいとも聞いた。そんな状態なので、もし今回の事件に関して日本で報道されているように、中国政府の報道規制がされているとしても、ありえない話ではないと思うが.....不確実な数字を安易に公表することを避けているのだと信じたいところだ。いま南京は急速に都市化が進んでおり、地下鉄工事の労働者が増えるなど、改革開放から取り残された農村からの人口流入も盛んになっている。本来静かな町が、何が起きても不思議ではないくらいの混乱を内包していてもおかしくない、とは思ふ。

## 2002/09/17 (火) あら、そうだったの?

「交通事故で一人や二人死亡してもニュースにはならない国」だと聞いたのは、この夏のことだった。中国の大きな町にはたくさんのタイトルの新聞があり、宅配の代わりに子どもや女性たちが朝の公園やターミナルなどで売っている。しかし、たくさんの新聞があっても紋切り型で画一的なニュースしか載っていないのなら意味がない。終戦の日に南京虐殺の慰霊碑を訪れた私たち日本人のことを、あのとき、7つ8つのカメラが取り囲んだ。勿論、事前に南京市がリークしたもので、しかも取材されるのは毎年のこと。

かなりの中国鼻根である私も、中国のジャーナリズムの仕組みにはいささか懐疑的なのだが、日本の環境

工学者が書いたの『中国で環境問題にとりくむ』(宗方正毅・岩波新書)を読んでいると、そこに挙げられているような危機的状況を、いったいどれほどの中国国民が認識しているのだろう、と気になる。中国全土の3割近くが酸性雨による被害を受けており、それが中国経済の発展にとって足枷になりはじめている。毎年2100平方メートルずつ砂漠化が広がっていて、このままだと100年で中国の耕地がなくなるという予測もある。

私たちも訪れた重慶(チョンチン)のことも取り上げられていた。そうか、蒋介石の別荘跡のある景勝の地・南山から見下ろした重慶の町の嘉陵江と長江の交わる地点が、やけにスモークで見通しが悪かったのは、曇り空のせいではなく、あきらかに大気汚染だったのだ。重慶は中国の代表的な酸性雨の都市である...と書かれてあるのを見て、私は思わず「アチャ~ッ」と声が出そうになった。

## 2002/09/18 (水) 語られる事実と語られない真実

中国に限らず初歩的な情報操作のテとして「明らかにしている事実には間違いはないが、明らかにされない部分に重大な真実が隠れている」という場合がある。

たとえば、重慶は神戸と同じように坂の町だといふので、神戸のHさんが「神戸は他の都市に比べ心臓病の割合が少ないのだが、重慶は?」と訊くと、案内人のCさんは嬉しそうに「そうなんです。重慶のひとよく歩きますから、心臓病は少ないんです」と言った。はっきりしたデータがあるのかどうか知らないが、おそらく事実だろう。車の外にみえる重慶の人々は誰も太ってはいない。なにしろ半端じゃない急坂と水運の町で、「棒々鶏」の語源という「棒」を担ぐ荷役人の姿が重慶では今も生きている。船や大型バスが到着すると両端にロープ状のものを付けた棒を持って男たちが集まってくる。ツアー仲間の60代の方も、荷物を持たせるとシッコク付き纏われていた。男たちも必死だ。失業問題は深刻で、職がないと荷物を担ぐことになるのだろうが、俄かに務まる仕事ではない。私は最初、この棒を見てスポーツの道具かと思ったが、その発想自体が中国を見誤っているのかも。都会の公園では朝から市民が集まって体を動かしているが、太極拳やダンスなどお金のかからないものばかり。投資の必要な器具を使うスポーツは育ちにくい。

さて、知らされている事実が「心臓病の少なさ」なら、知らされない真実というものもある。宗方さんの本によると、大気中のSO<sub>2</sub>濃度が高い酸性雨の町・重慶は肺がんの死亡率が中国でもトップだといふ。歓待してくれた重慶市役所の方々が意図的にそのことを隠そうとしたとは思いたくないが。

7月例会報告 (7月20日キャンパスプラザ京都)

## グローバルズムと構造改革

～ 痛むのは誰?…子会社に隠される悲鳴～

講師：島本慈子さん(ノンフィクションライター)

「リストラ」に苦しむお父さんたちの姿をテレビでしばしば見かけ、自殺者が3万人を超えたという報道も目にしていた。いじめというべき陰惨さで自主退社に追い込む「リストラ・マニュアル」の存在も、経営者が責任をとらずに末端の労働者ばかりが痛みを押しつけられる構造も、何か日本的な体質だ……と、漠然と思っていた。それらが「規制緩和・グローバル化」の必然的帰結だとまでは、正直、考えてなかった。

キャッシュフロー会計(常に短期的な黒字を出すことで投資家を呼び込まねばならない)の導入によって、売上げが落ちれば即座に雇用を切り捨てるために、正社員を減らして派遣やパートを増やすことが、企業にとっての構造改革であり低コスト体質への転換だということになってしまった。純粋持ち株会社の解禁、会社分割制度の簡便化など、企業が身軽に人件費を切り下げられるよう国を挙げて法整備が進んだ。

国際競争力を高めるために、雇用流動化の掛け声のもと、人件費の圧縮に躍起になる企業。解雇を恐れて会社に対して何も言えなくなる社員。

ものの値段が下がるのはありがたいことだった。会

社に忠誠を誓う日本型雇用なんてまっぴらだった。国鉄がJRになって駅員の態度は良くなった。族議員にも官僚主義にもうんざり。……でも、現実に行っているのは望んでいた改革とは違う。利益がすべてで、安全も人間も二の次。安全を守り、最低限必要なサービスを国内のどこでも保証するという公共性そのものが、市場原理の名のもと、この国から消えつつあるのではないか。それもこれも、もの作りで衰退したアメリカ経済が、マネーで稼げる仕組みを拓げるために……。

島本さんは講演の最後、薬害HIVを取材した経験から、思わず涙を流してこう訴えた。これはおかしい、間違っている!と、現場の人間が声を上げられない世の中、会社に対してものが言えないという状況は、社会にとって、私たちにとって、あまりにも危険だ。

このままじゃダメだと、痛みを耐えると意思表示した国民。でも小泉改革の果ては、ものも言えない陰鬱な社会だなんて! 人生、足の引っ張り合い以外にも、やることはあるはずなんだ。(感想：島田)

### 書評 『子会社は叫ぶ』

～この国でいま、起きていること～  
島本慈子 著 筑摩書房 定価 1800円+税

「すでに日本の社会は変質をはじめているのに、その変化がまだはっきりとは見えない。一般には見えにくい変化が、子会社という舞台には先取りで現れている」(『はしがき』より)。著者の島本さんが子会社の取材を通してまのあたりにしたことは、人としての誇りをずたずたに踏みにじられ、使い捨てにされていく労働者の姿であった。

この本には、全日空の系列子会社の関西航業を親会社の意向で解雇され、裁判闘争に立ちあがった労働者たちなど、いくつかの生々しい事例が述べられている。それは、まさにいまこの国で起きていることの冰山の一角と言えるものである。

この本が胸を打つ理由は、何よりもまずこれらの労働者たちへの著者のあたたかいまなざしであり、これらの労働者を使い捨てにしようとする者への怒りであ

る。著者はこのような現実が、世界的なグローバルゼーションのもとで、わが国において進行する規制緩和の結果だと鋭く告発する。自己責任・市場原理の徹底化が、労働現場においていかに過酷で非人間的な事態を生みだしてきたことか。著者は本書の第二章において、細川連立政権時の平岩研究会報告から現在に至る規制緩和、とりわけ労働法制の変貌についてまとめている。進行する事態を理解するための的確なまとめとなっている。

働いて生きていくという人間の最も根幹的なところに、グローバルゼーションがどのような影響を及ぼしてきているのか、著者はこのことに正面から向き合うことを求めていると言える。「これは一過性の痛みではない。このままでは社会が変質してしまい、もの言えぬ暗い時代が再びやってくるのではないか」、著者はこのような時代のなかで「人の痛みについての想像力」こそ重要だと結論づける。その通りであろう。同時に、非正規雇用労働者がますます増大するなかで、企業内労組の限界を越える新たな労働組合、労働運動を再建していくことが求められていると言える。(山本 純)

# わたしとアタック：変革の可能性と「溜まり場」運動

在野真麻

正直なところ、わたしは日本においては底辺生活者でしかない。そのわたしがこの5月に京大で開かれたATTAC京都の設立集會に参加し、その場でメンバーリストの登録を済ませて、まだ会費の規定すら出来ていなかった段階で「会員」になったのは、はっきりいって、ここからなら日本においてイデオロギーやセクトエゴを超えた“新しい”(市民)運動の旋風を巻き起こせるかもしれない、と思ったからだ。アメリカをはじめ先進国主導のグローバリズムに異議を唱え、商取引の0.1%の利益を「南」の人々のためにトーピン税という形で徴収し、両者の不均衡を是正するために再配分しようと主張し、世界的な運動を起こそうとする人たちが、赤い%マークの旗をなびかせて、そこにいた…。昨年の9.11でいっそう際立ってきた「世界の警察」アメリカの覇権主義体質は、軍事面だけでなく、その本質が食糧を中心とした経済侵略にあり、それを阻止していくには広範に「まともな世論作り」

をしていくしかないだろうと思ったから、迷わず参加した。

参加してみると、予想通り学生時代ならとても同じテーブルに着くことはなかったと思われる運動の経験者とも出会ったが、学生や、いわゆる職業として机上でものを言える立場の“学識経験者”も多かった。女性は少ないが「経済至上主義」を批判して環境保護運動に参加するひとは多いと思うので、その辺でまだ聞きなれない「アタック」の運動には慎重なのか。はっきり言ってわたしがこれまで問題認識の基本に置いてきたジェンダー格差の問題はここではまだ未解決の問題であって、そのあたりでもやり甲斐がありそうだ(笑)。

いまアタックは、来月下旬にフランスの農民運動家ジョゼ・ボヴェを日本に招くことになり、いま京都でも法然院で開催する講演会を準備している。そこでは、たまたまそれを面白がるひとが集まったせい、ボヴェTシャツ

を作ったり、アタック京都のテーマソングを作ろうといった従来の市民運動と文化運動の融合のような運動作りを目指している。他の運動グループも巻き込んで実行委員会で作ったメンバーリストはそのあまりにもの活発さに(?)退会者が出るほどである。

こうしたアタック京都の動きについては、市民運動の「溜まり場」としてのカフェ作りを模索する知人も非常に注目している。もともとは自前の活字メディア作りを中心として、市民運動の情報発信基地としてカフェを作ろうというのが彼のめざすところなのだが、そこでは文化芸術と市民運動の融合が必要で、京都を訪れるマスコミやスタディツアーの受け入れ・情報提供ということも射程に入れているという。なかなか面白そうだ。いま、アタック京都は、随時、喫茶店や公共施設を借りて活動をしている状態であるが、ここに各種運動の交流の場としての「溜まり場」があれば、運動はもっと広がりを見せるかもしれない。



**ATTAC京都メンバー紹介 その3**  
 島田 理聡さん(無職・無所属・物語作家・かたつく編集メンバー)

東京生まれ東京育ちの私が、ダンナの就職に付き合っ初めて東京を離れてやって来たのが京都でした。少女小説で何冊か本を出しましたが、ここ何年も商業出版とは縁がありません。新作は自分のサイト 一輪庵 で発表しています。

大学の学部と修士のとき非暴力思想キング牧師やガンジーをやっていたので、社会運動には興味がありました。でも運動って沢山あって、どれが一番大事な問題なのか…きつかけも縁もなく、積極的には参加してきませんでした。

アタックは現代の問題を包括的にとらえていて、しかも具体的なアピールとアクションを持っている。「未来を自分たちの手に取り戻すために」ってコピーを見たとき、すごくピッタリきたんですね。「未来」なんか本気で夢見たことなかったけど、それでも、少しでもまじな未来を手に入れるために、何かやっておきたい…今はそんな気持ちです。



今週のお言葉  
 様子見が、  
 長引きすぎて傍観者

## イベント&集會情報

- 9月22日(日) レバノン・パレスティナ報告集會「パレスティナ難民は、今」/報告 岡真理さん他/午後2時~5時/大阪人権センター(JR 芦原駅下車5分)/主催 「パレスティナ難民は、今」実行委員会/参加費 800円
- 9月27日(金) 連続講演会 <世界>の現在と<知>の未来 第一回「ジャーナリズムの可能性」/講師 石丸次郎(アジアプレスインターナショナル)/午後6時30分~8時30分/京都精華大学/主催 京都精華大学/参加無料・申し込み制\*
- 9月29日(日) インティファダ・アル・アクサ2周年連帯関西集會「パレスチナに平和を!日本-パレスチナ交流週間」/パレスティナ現地より訪日団/午後6時~/エル大阪6階大会議室(「天満橋」駅下車)/主催 関西集會実行委員会/参加費 1000円  
『心のノート』とあぶない「心の教育」を許さない!京都府民集會/講演:『心の教育』の危険性 野田正彰/午後1時30分~/京大会館(京阪「丸太町」駅、市バス206・201系統「京大正門前」)
- /主催 同実行委員会
- 10月6日(日) ピースウォーク「戦争はイヤだ! 戦争にノーを!」/午後2時~ /御射山公園集會(ウイングス京都南)/主催 ピースウォーク京都
- 10月11日(金) 連続講演会 <世界>の現在と<知>の未来 第二回「私たちは今どこにいるのか」/対談 橋口譲二(写真家)×西研(哲学者)/午後6時30分~8時30分/京都精華大学/主催 京都精華大学/参加無料・申し込み制\*
- 10月12日(土) ATTAC 関西10月例会/午後2時~5時/スペースAK(地下鉄「南森町」下車)/参加費 1000円
- 10月16日(水) 上映会「人らしく生きよう-国労冬物語」/午後6時30分~ /京都大学文学部新館第一講義室/主催 ATTAC 京大/共催 闘う闘争団を支援する京都の会/入場無料  
\*精華大学申し込み先 = 〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町 137 新学科学準備室 / 075-702-5197 / tyoichi@kyoto-seika.ac.jp